

公務現業部門を対象にした対人聞き取り調査報告

小松原 尚

1. 調査の目的

奈良県立大学にあっては文部科学省大学改革推進等補助金を活用して、「地学連携と学習コモンズシステムによる地域人材の育成と地域再生」をテーマに地（知）の拠点整備事業に取り組んでいる。その事業の一環として地域志向教育研究費助成の実施をみている。2016年度には本稿の執筆者である小松原は「学生の進路実現のための地域志向教育に関する調査・研究」に取り組んだ。

学生たちにとって、高校生と社会人をつなぐ本学での4年間の教育課程は、進路実現のための重要な期間となる。そのことを念頭においた教育研究活動として、学生の協力を得て学習空間環境の調査活動を行なった。この調査の目的は、学生が進路実現のための学生自ら調査活動を行なうことにある。

本学においても学生が自らの就職先として公務員を上げるケースが多々見られる。ただ、学生の意識・関心の様子を見てみると公務員という仕事の多様性を理解した上での希望・志望とは必ずしも言い切れないと考えられる。そこでこうした教師としての問題意識から、筆者は学生諸君を引率して、公務の現業部門の職場を訪問し職員の皆さんから直接お話を伺い、学生自らがこの職場訪問を学習空間としてどう位置付けたのかを調査することにした。

2. 調査の概要

2016年6月16日(木)、小松原尚教授、津田康英准教授、藤森茂准教授、山部洋幸講師の引率のもと、「平城ニュータウンの環境整備と公的サービスについて考える」をテーマとして、地域経済コモンズゼミ I (2年次生対象)の学外活動がおこなわれ、40名が参加をした。

近鉄高の原駅近くにあり、全国的にも珍しい駅前下水処理場である平城浄化センターは、静脈系の都市インフラ整備の実態を「下水道システム」の見学を通して観察し、公的セクターによる公共サービスの質的・量的内容と存在意義について、各自で考えてみるための格好の素材であった。

平城浄化センターでは、私たちが生活に使用した水をどのような流れで再生されているのかという「下水処理システム」について、担当の方から実演も交え、専門的な用語についても丁寧に教えていただいたこともあって、平城浄化センターという施設について深く知ることができた。

3. 調査結果活用の展望

今回の活動は、職業選択にとって重要な幅広い職業観の醸成に役立つと考えられる。公務員(本学からは一般行政職、総合職のみ受験可能である)志望の多い本学にあっては何にでもなれるという教育が必要である。その教育のプロセスにあって学外の教育環境との連携による体験的活動が役立つのである。本調査はそうした学習空間環境の設定を考える上で学生視点からの検討のための素材になると考えられる。

この調査活動に際しては、奈良市企業局管理部下水道計画監理課施設係長の杉村治久様をはじめ「奈良市平城浄化センター」の皆様にお世話になった。記して感謝申し上げる。

本研究では、文部科学省大学改革推進等補助金(地(知)の拠点整備事業)「地学連携と学習コモンズシステムによる地域人材の育成と地域再生」の一部を使用した。

この活動の概要は、「奈良県立大学情報誌 コモンズー学びの共同体ー 第9号」および「奈良県立大学広報誌 キャンパスジャーナル 第4号」に掲載された。

第1表 聞き取り内容の構成

	項目	観点
①	現場・現地愛着度	現場や現地での暮らしや仕事への関心、それを続けたい意欲について
②	暮らし働き方私史	自分自身のここでの暮らし方や働きぶりについて
③	人的交流度	職場の人たちとのかわわり

第2表 現場・現地愛着度

通番	観察内容
100	仕事はきつい。下水道の特性上、24時間止めるわけにはいかないため交代で寝泊まりする。ただ、専門技術を身に付けてきた人が多いため、みんな意欲的にやっている「はず」とのこと
101	浄水場の人たちは様々な人生を送ってきた人たちが現在集まって、皆で協力し合っている。前は違う仕事をしていた中途採用の人から、新卒の人までいるという。たいてい、新卒のひとは、24時間稼働していかないといけないというとてもハードな仕事内容についていけずやめてしまうことも多いという。たしかに、本当に丸々365日、24時間動き続けているのを交代で見続けるというのは、夢見た社会人生活とはかけ離れているかもしれない。土日は子どもと遊んだり夜はデートをしたりすることができないのだ。これは、まだ人生を謳歌しきれていない若者からすると必要以上に厳しい労働条件だととらえてしまうだろう。そうならないためには、しっかりとここで働くとはどういうことか、生の現状を調べて、ある程度覚悟を決めて就職をしなければならない。それに対し、ある程度くらいについて仕事をつづけた人や中途採用の人にとっては、専門技術を身に着けたり、しごとを自分のものにしたたり、みなで力を合わせて頑張ってきたということ、そして自分は人の生活の基盤を支えているのだということから、誇りをもって働いているということが分かった。このような人たちは今後も自身と誇りをもって頑張って仕事を続けていくと思う。
102	正直なところ、仕事への楽しみというよりは家族の生活のためにこの仕事を続けているということであったが、市民のために必要不可欠であるという使命感や、誇りをしっかり持って働いているということを語ってくれた。自分が誇りをもって働いている下水処理場に興味を持ってもらうために、一年に一回下水道の日を作り、各処理場での見学を自由にしたり、催し物を開催したりしている。全く別の職場から中途採用で働いている人もいて、24時間交代で処理場の管理をしなければならない、仕事はハードであるが、社員との交流も大事にして働いている。
103	浄化センターの人たちは生活のためということを前提としながら、暮らしている人の生活を見えないところから支えるために仕事に従事されていた。平日の昼間にも関わらずイオンには多くの人が見られたので、あのあたりに住んでいる人の生活はイオンに大きく支えられているように思えた。
104	仕事を続ける一番の理由は生活のためである。無くてはならない施設ではあるが、地域住民の方には迷惑施設と捉えられており、それに対しては小学生の見学や、啓発によってしっかりと意識改善もしていきたい。浄化センターという生活環境を整備するための施設に働く限りは、きちんと責任をもってその仕事を全うしていく。
105	下水処理施設は365日、24時間、泊まりがけで管理しなければならないので、若い人の中にはこの仕事についていけない人もいるようである。地域住民の暮らしの妨げにならないように下水の匂いには細心の注意を払っているようだ。下水処理施設から異様な匂いが周囲に漂わないように、莫大な費用をかけて匂いを消している。たった一人の苦情や批判から下水処理施設は迷惑施設だとみなされ、下水処理施設に対して抗議運動が起こることを防ぐためであるそうだ。
106	正直仕事は仕事であるから行っているとおっしゃっていた。またそれに続けたい意欲についてもその理由をおっしゃっていた。この下水場は専門職であるために新しい人材を育てるのが大変で、若い人の従事が少ないと聞いた。
107	浄化センターの中を見学させていただいた際にさまざまな機械があり、多種多様な小さな部品が転がっていたので、平城浄化センターで実際に行う仕事は、機械に詳しくならなければならないのではないかと感じた。そのため私は仕事内容よりも平城浄化センターの雰囲気や考え方に関心をもった。平城浄化センターの方々とはみなさん笑顔で、働いているのは生活のためではあるけれども、平城浄化センターで働いていることに誇りを持っているとのことだった。また職場では技術の教え合いでコミュニケーションをとっており、社会人として仲良しこよしよりお互い切磋琢磨するような仲が好ましいとおっしゃっておられたことが心に残った。お互いに仲良しこよしでやる方が楽であると思うが、自分自身や会社の成長にはつながらないのではないかと気づかされ、またお互いに切磋琢磨するの、時にはお互いに教え合うというのが良い点であると思った。
108	この仕事を続けているのは家族との生活のためであり、特別関心があったり楽しいと思うわけではな

研究資料

	いという解答をいただいた。関心も楽しみもあるわけではないが、やはり汚れた水をきれいにして川に返すという、人々が生きていく中でなくてはならない仕事であるという誇りがあるようである。
109	職員の人々の仕事への関心は、やはりそれぞれでちがうのだと感じた。前で説明をされていた方は本当にこの処理場での仕事に誇りを持ってやられているのだということがわかった。
110	地域住民へ非常に大きな関心を寄せ、地域住民のことを第一に考えて仕事をされていた。住民の方の迷惑にならないよう、嫌な思いをさせないために努力されているのがよく分かった。また、自分の仕事に誇りを持って意欲的に取り組んでおられた。
111	生活のためというはもちろん、地域住民の暮らしのためという使命感を持って働いておられた。また、技術を身に付けていこうとする意欲のある姿勢が感じられた。
112	浄化センターという地域住民からは「迷惑施設」だと苦情を受けることが多々あるが、下水道システムは人々が生活を送るうえで欠かせないものであり、そういう点でこの仕事に誇りを持っている。交代で 24 時間管理を行う必要があり、また、天候によって仕事量が左右されるといったようなハードな勤務内容であるが、自身や家族の生活のために働いている。
113	住民の方々との交流の機会も設けている。浄化センターのマイナスイメージを少しでも軽減させたいのと、排水溝に流しはげないものの啓発活動として、年 1 回毎年 9 月に「下水の日」を設けて、浄化センター内の見学を許可している。ただ水の浄化という仕事をこなすだけではなく、現地の方々との交流も行っている。浄化センターでの仕事は必要不可欠である一方で、住民の意識は低い。しかし、「下水の日」からも従業員の方々が自分の仕事に関心をもって、浄化センターの役割を広めようとしている。そして、自分たちが水をきれいにしているという実感がうまれると仕事への意欲も増すようである。
114	現場に泊まり込み、24 時間交替制で処理をしているため肉体的にかなりハードな環境である。仕事への関心については、従業員それぞれの採用状況による。新卒の従業員は初めての仕事に期待を抱いている。それに対し、中途採用の従業員は、前職とは勝手が違うため辛く感じると説明されていた。しかし、従業員の方々は、平成浄化センターでの仕事に使命感や誇りを持って働いており、これからもその気持ちを持って働きたいとも説明されていた。
115	第一は生活のため。お正月も休むわけにいかないで、毎日 24 時間 365 日交代で働いている。地域の方が暮らしやすくなるようにと思っている。技術系の仕事が多い。臭いとクレームがくることもあるが誇りをもってやっている。
116	仕事への関心は説明ぶりからもわかるように非常に高いように思えた。
117	奈良県下のほとんどの水をきれいにしている、との自覚にみち、それを誇りに思っている。
118	現地愛着度は低いと感じた。理由は、「下水処理場での仕事のやりがいは何なのか、楽しみを感じる時はどのような時か」といった質問に対して、「家庭のために働いている。仕事なので楽しみを迫及するものではない。あくまでも仕事」といった内容の返答であったためである。仕事への関心に関しても、「この仕事をするようになった経緯」といった質問に対しても、「様々な経歴を持った方がこの仕事に就いている。新卒・高卒・中途採用の方などがいる。特に中途採用の人は、今まで別の仕事をしてきた人が転職をしてこの仕事に携わっているため、技術職なので大変だと思う。」といった返答であった。私は、この質問に対する返答で「あまりこの仕事にもともとやりたくなかったけれど採用され、家庭を支えるためにお金が必要だから仕方なく働いているのである」といった感情を持ちながら働いておられるのではないかと感じた。確かに、「下水処理」は汚い水を綺麗にする役割があるため、汚いといった印象があり、あまり望んで就職する人も少ないと考えるため、「家庭を支えるために働いている」といった返答になってしまうのも無理はないのかもしれない。
119	仕事というのは金銭を稼ぎ家族を養うためにするのだが、下水処理という地域の住民生活を支えているという自覚とプライドを持って働いていらしかった。

第3表 暮らし働き方史

通番	観察内容
130	仲間と切磋琢磨。協力だけしているのではいつかマンネリ化する。そうではなく、仕事仲間と競い合うことも
131	周囲の人々は、この施設はなくてはならない施設なのに、迷惑施設だと勘違いをしている。たとえば、変な臭いがする、とひとりでも言い出したらあつという間に周りに広がって、活動をしばらくなくなり、肩身が狭くなったりする。だから、自分たちは誇りをもって働いて、浄水場とは生活をしていくためには必須なのだ小学生のうちから浄水場の見学をすることによってしっかりと教えることが大切になってきている。彼ら自身の暮らしに満足しているのかどうかは聞き出せなかったが、誇りをもってやっているということは分かったから、きっと満足していると思う。また、このように住民から迫られないように特に臭いが出ないように活性炭をフル活用して気をつけるということでは普段から

公務現業部門を対象にした対人聞き取り調査報告

	大変といていたが、これをクリアし続けることによってさらに自信を持って働けるのだとおもうと頑張れるのではないだろうか。
132	下水処理場ということで、地域の方から汚いイメージを持たれ、苦情が来てしまうこともあるとのこと。苦情が地域の中で拡大してしまうと、立ち退き運動になりかねないので、そうならないためにも異臭には十分注意をはらっている。一般的には郊外に建てられる下水処理場が駅前建てられており、めずらしい施設であるため、全国の市町村の職員が見学に来られることが多い。
133	浄化センターの人は駅前という立地への苦情をうけたりしながらも、普段目に付かないところで人々の生活を支えようとしてくれている。
134	24時間交代制の職場であるので、体の負担などを考えると厳しい職場ではある。しかし、自身の生活のため、自分の仕事は地域にとって大切なものであるため、しっかりと責任をもって働いている。
135	本音を言うと私生活のために働いている。しかし、下水を処理することで、人々のために役立っているという誇りも感じているようである。
136	ここはあまり聞くことが出来ませんでした。
137	フードコートでワークシートを書いている際に、いつもフードコートで集まっているという地域のおじいちゃんおばあちゃんたちが、大人数で何をしているのかとも気になっているということで話かけてくれた。そのときに平城浄化センターに行ってきたことを伝え、臭いや水の汚れなど気になったことはあるのかどうか尋ねてみると、気になったことはないと言っていた。地域住民の意見を聞くことができたのは良かったところであると思うが、平城浄化センターで働いている方々に自分からもっと質問していくことも必要であると思った。
138	水を浄化するための施設は二十四時間動き続けているので、従業員の方々も二十四時間交代制で働かなければならず、心身ともに疲労がたまるようであるが、上記の通り人々の生活の中になくてはならない仕事であるので、使命感を持ちながら働いているということである。
139	効率化を図るため、奈良市の処理場にまとめるよう交渉をされていることがわかった。24時間365日処理をしなければならないため、大変な苦労があることも伺えた。
140	自分自身が実際に暮らしているため、油やごみなどは絶対に流さない気をつけている様子であった。24時間体制のため、正直かなりつらい仕事だとおっしゃっていたが、それでも自分たちの仕事はなくてはならないものだと前向きに仕事に取り組んでおられる。
141	365日稼働しており交代で働いているなど大変そう的一面もあった。若い人の中にはついていけない人も出るそうだ。働いている人は新卒の方だけでなく、全く違う仕事をした後に中途採用で入られた方もいるようだ。
142	「下水道の日」にはティッシュ配りやポスターの掲示、見学の受け入れを実施する等して啓発活動を行っている。地域住民の苦情に屈せず、地域住民が暮らしやすいように「悪臭を取り除くこと」や「水をきれいにすること」を心がけている。
143	浄化の仕事は決して楽な仕事ではない。技術職であるので習得するのは難しいし、24時間交代でセンターの管理をしなくてはならないなどの苦労も多い。しかし、周りの住民からは「迷惑施設」というイメージが強く、浄化センター自体も外からは何をしているかわからないというように、日々の苦労はあまり理解されていないように感じる。それでも、浄化センターの従業員たちは、住民の生活水を扱うという責任感が強く、真摯に仕事と向き合っている。
144	現場に泊まり込み、24時間交代制で処理、監視をしている。仕事に関して使命感や誇りを持って働いている。
145	新卒の人や全く浄水場とは全く関係ない職種からきた人もいるので、できるだけ早く技術をおぼえられるようにサポートしながら働いている。
146	暮らし方、働きぶりに関しては特に言っておられなかったので大きな不満はなさそうです。
147	24時間体制かつ交代制のため、全員泊りがけで仕事している。
148	平城下水処理場で働く職員は「生活のためにここで働いている」という精神で働いていらっしゃる。しかし、下水処理という社会では必ず必要となってくる仕事に携わっていることに対する誇りは持っているらしかった。「下水を綺麗にしているという意志を持っている」とおっしゃっていた。下水処理場は、24時間機械が作動しているため、365日24時間体制で仕事をなさっている。そのため、若い職員はかなり厳しい労働条件に耐えきれずついていけない人が多いという。職場の人は何かしらの資格や技術を習得している。例えば、機械、電気、土木などである。前述しているが、中途採用の人は、全く違う仕事をするのは大変であり、新卒の職員は期待を胸に働くが、仕事なので厳しい。
149	正直楽な仕事とは言えないので仕事には誇りを持っている。周りの住人の方に細心の注意を払っている。

研究資料

第4表 人的交流度

通番	観察内容
160	周辺住民から苦情が出ることも。浄水場である以上異臭が出てしまうことがあり、周辺住民から告められる場合もある。そうならないように日々注意深く仕事をしている。職場の仲間とは時には協力し、時には切磋琢磨する。飲み会仲間もできる。実際、別の従業員の人も良いコミュニケーションが取れているように見受けられた。
161	職場の人たちは、先述した通り、専門技術を付けようと教えあったり助け合ったりしながら頑張っている。また、仕事以外の付き合いとしては、飲みに行ったり笑いあったりしているらしい。また、その仲間たちが前職を知っているのを考えても、このように職場以外でもたくさんお話をされているのだろうということが想像できる。仕事上の付き合いだけでも仕事自体はうまくいくが、よりスムーズに仕事を進めるためにも、やはりプライベートでのお付き合いも大切だと分かった。また、最後に生徒へのメッセージとしてひとこと言ってくれた。競争と協調のバランスをとって、仲間と切磋琢磨しながら成長しろ、ということだった。きっと彼らも協調と競争を繰り返しながら今まで人生を送ってきたのだと伝わってくるくらい、言葉に重みがあった。私も大学に入ってから今まで以上にテニスを頑張っているため、この気持ちはよくわかる。しかし、まだ私が経験していない未知の世界もきっとあるはずだから、仲間やライバルといつでも競争と協調を胸にしまいながら精進していきたい。
162	下水処理は技術職であるため、確実に技術を習得してもらうためのコミュニケーションは欠かせない。休憩時間に雑談をしたり、仕事終わりに飲み会へ行ったりすることで親睦を深めている。
163	職場では一緒に飲みに行くなど良好なコミュニケーションが行われているようだった。職員さん同士のやり取りを見ても仲がよさそうだった。
164	職場の人々の経歴は様々である。初めから浄化センターで働く人もいれば、全く別の職業から転職した人もいる。専門的な知識が不足している人には、知識を持っている人がきちんと知識を教えることで、資格をとってもらい、専門職としていきたいようである。
165	現在の自分の仕事は技術職であるので、まだ技術職ではない若い人には、将来、技術職になれるようにコミュニケーションをとって知識や思いを伝えているようだ。中途採用で全く異なる他の業界から下水処理施設の仕事に就くことになった人もいる。社会人なので厳しい面もあるが、食事に行き、一緒にお酒を飲んだり、笑ったりもするようである。友達は大切にして、職場では切磋琢磨、競争と協調のバランスをとることが大切であるようだ。
166	正直このような工場はあまりいい目を見られていないそうです。ただこの下水場はそんななかでもイオンや駅など公共施設の近くに作られている珍しい場所だそうです。
167	平城浄化センターの方が話しているのを聞くという一方通行の会話で終わってしまった。質問する機会はずっとたくさんあったので次からはしていきたい。
168	仕事をしているときはお互いに厳しくしているが、仕事が終わった後などは浄化センターの従業員の方々みなでお酒を飲んだりご飯を食べたりと、あまり公私混同しないよう共に暮らしているようである。
169	時々皆さんで呑みに行ったりされているとの話があり、また、職員の方同士のやり取りをみても、信頼しあっている関係なのだろうと感じた。
170	職場の人たちとはとても仲がよさそうであった。質問された内容で不安なところがあるとより詳しい方に聞いたり、回答に詰まるともう一人の方がフォローに入ったりと、互いに助け合っていた。普段からこのように助け合いのいい関係を築いていると思われた。
171	浄水場という生活に必要な不可欠な施設であるが、地域住民の中には汚いといったマイナスのイメージを持つ人もいたり、また実際に地域住民への悪影響をもたらさないようにという思いから悪臭対策などにはお金をかけて対策に努めているようだ。また、環境への配慮や小学生の見学の受け入れ、一般の方にも見学する機会を設けるなど浄水場への理解向上にも働きかけていた。やはり仕事をやる上で技術は大切なので先輩が後輩に教育てていく中でもコミュニケーションをとることが多い。後輩に対しては仲間同士で協力しあつて競争することで切磋琢磨してほしいようだ。
172	社外コミュニケーションや休憩中における交流はとっているが、公私の区別をきっちりつけている。下水処理は技術職であるため、その技術習得に向けての新人教育が行われている。
173	下水道処理は技術職である。そのため、新人たちには覚え、慣れていくことばかりでとても大変な仕事でもある。しかし、そこは早く技術取得をしてほしいというのが先輩たちの気持ちである。そこで、先輩方と新人たちが積極的にコミュニケーションを取り合って、助け合いや指導をしていく。このように、職場の人材育成のために、浄化センターの方々はコミュニケーションを大切にしている。そして、協力するなかでも同僚には絶対負けたくないという闘争心をもってお互いに刺激し合って仕事をすることも大切にしている。
174	技術職を派遣しているため、従業員が技術職の免許を取るように勉強してもらっている。

公務現業部門を対象にした対人関わり調査報告

175	様々な年代や学歴、経歴のひとがいる中でコミュニケーションをとって、教えあいながら働いている。切磋琢磨している。年に一度、地域にゴミを水道で流さないように声をかけている。
176	みんなと仲良さそうで、笑顔であったため職場の人たちとのかわりは良好と思える。
177	この仕事は技術職であるため、新人が入ってくるとその技術を伝える。
178	職場の人たちとの関わりは、希薄であると感じた。下水処理場で働かれている方々は、技術職であることも影響しているためか、「仕事である」ということが重要視されている。そのため、仲良く仕事をする気はあまりないように見受けられた。実際に部署長さんが「職場での人間関係についての質問」に対して、「仲良くこよして仕事をするのもいいかもしれないが、私たちは技術職であり、仕事は仲良くするのではなく、『あいつには負けないぞ』といった切磋琢磨していくことも大切だ」といった内容の返答であったことから、職場での人間関係は緊張感があるように感じられた。また、新卒や中途採用で技術を全く身に着けていない人には、早く技術を身に着けてもらうように指導している。といった内容も教えて頂いた。早く技術を身に着けないと仕事上使い物にならないためである。この言葉からも、かなり厳しい指導が行われていると予想できる。もう一点、職場の人たちとの関わりが希薄であると感じた理由は、「下水処理のしくみの中で、電力の使用量が最も多い工程はどこであるか」という質問に対して、部署長さんが答えた場所と電気担当の職員さんが答えた場所が異なっていた。そこから、作業内容についての情報交換が希薄なのではないかという印象を受けたためである。しかし、早く技術を身に着けて技術人になってもらうようにコミュニケーションはとっているようだ。同僚と切磋琢磨していくことはやく技術を身に着けるといった、同僚との「競争」と職場の環境に「協調」していくといった「競争と協調」を大切にしていることが分かった。その点から考えると、やはり技術職という仕事は、「競争と協調」を重視しているため、職場の人との関わり合いが希薄であるようにみえるのだと考えられる。
179	下水処理の日というのを設けて地域交流をはかったり、屋上に公園を設けて住民の方に利用していただいている。

